

郷土長瀨を描いた川合玉堂

調査研究係 小田 昇

序文

調査研究係として任命をうけ、微力ながら日本画家・川合玉堂の作品と人生観について紹介する事と致しました。

生前、玉堂芸術は詩画の世界「自然の美に生きる」として「人間の住みやすい自然を描き、形式的な山水画を近代風景画へと蘇生させる先蹤になりたい」と常々話していた。

玉堂は語っている、「日本画の特徴は自然を日本画風に加工するところにある、違った良い場所を集めて、それを継ぎ合わせて一つのまとまったよい絵にこしらえるのである、それには旅によるモチーフが重要となる」さらに彼は語っている。

「風景の写生も先ず初めに荒川や多摩川の溪谷に入ってみると、もう振るいつく程いい、よく川に出かけた」と語っている。

玉堂は大正二年四十歳〜五年四十三歳の間に四度、荒川長瀨へ取材に出かけ写生した直後「行く春（六曲一 双屏風）」を完成し後にこの作品が重要文化財に指定され生涯表する風景画となった」と語っている。

玉堂の人氣は急上昇し大正十年には多額納税者にランクされ話題となった。

平成三十年春、東京国立近代美術館で「所蔵作品展」として展覧した、この中に玉堂の「行く春」が第一室に展示された、小生早速見学して参りました。

数ある展示作品の中でも際だった存在感を誇っていた、小生の故郷が目の前に六曲一 双の襖絵によって表現されている。

懸崖がそびえ立ち滔々と川は流れる。

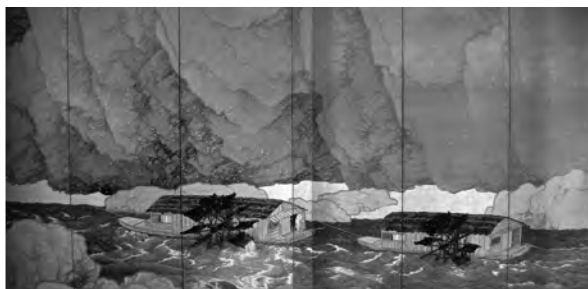
水車は飛沫を上げて勢いよく回り、川岸には春の名残りの花吹雪、船縁の人影が風景に情感を添える。多くの見学者が足を止めしばし作品を見る。

そこで調査研究テーマを「郷土長瀨を描いた川合玉堂」とした。

川合玉堂の画諷

川合玉堂、本名方三郎は明治廿八年、愛知県葉栗郡外割田に生まれた、芳三郎少年は時流を離れた県境の山奥で育つ。

その頃の幼年時代を振り返って玉堂は、「私の父は画家ではありませんでしたが、非常に自然が好きで弁



大正5年・川合玉堂、生涯代表作「行く春」
6曲1双 (1.84×7.88m)
東京国立近代美術館蔵 (重要文化財)

当など準備するとこれを茶箱に詰め、私の手を引いて山へ行き、美しい風景を見ながら食べたものでした」と言っている。

後年画家として大成したのも、こうした幼い時から自然に親しんだことが人生を変えた。自然に親しむところから、自然の美しさを訪ねて画家になると第一の門出は、岐阜尋常高等小学校を卒業し、理解ある父の勧めで明治二十年、四条派の望月玉泉の門に入るところから始まった。

望月玉泉は玉舟という号を与えた。十四歳の時である。この時に残した一連の写生を見ると、その質とともに量の膨大さに驚く。また写実力の巧妙は鋭さの他に、柔軟な詩情がただよぶのが特質といえる。

京都画壇の写生の修練は応挙以来のもので有り、身辺の花、果実の写生から徐々に小鳥小動物といった動きのあるものに入ってゆく。それと平行して「玉」や「槌」といった簡単な運筆を教わるが、そのどちらにおいても頭角を現わしていたといえよう。

草花の写生が写実一点張りではなくふくらみが有るのは運筆のよさがある。素直な心の持ち方といった。自然に対する敏感な反応が写生の随所に感じ取れる。

自然の発するモルルス信号をどのようにうけとめるか、最初のややぎこちなさの感じら

れるものから、余裕をもって造化の美しさを解く鍵を徐々に自分の手に入れていく段階がこの集のほとんどをしめる、明治二十年代の写生に如実にうかがえる。

応挙の写生画譜は近代日本のルーツとして重要なものであるが、玉堂の若い日の写生はその精神と教えを素直にうけついでものとして、応挙の写生の展開でもある。

明治二十三年、玉堂は第三回内国勸業展に出品して褒賞を受けられる程に画技が進み名も玉堂と改めたが、玉泉は京における名門ではあってもその指導は保守的な面も無くはなかったから、その後同じ四条派の出では有るけれど狩野派や南画をも研鑽していた幸野棧嶺の大成義会に身を投ずることになった。

ところが、大志を抱いて日夜修行に励んでいた玉堂は、明治二十四年、濃美を襲った大地震で敵父を失うと云う悲運にあう。そこで何としても画家として世に立つ決心で、母を伴って京都に戻るが、半年ほどの後に今度は慈母を失うと云う二重の不幸に襲われる。

また二十八年には、師の模嶺も他界したがこの年の第四回内国勸業博覧会に出品された橋本雅邦の「龍虎図屏風」に接し古典をふまえた描線、雄渾な構図のうえに、写実を加味した今までにない洋風の色彩感覚等に強くうたれ、玉堂は心の底から感動し、画家として



明治から大正にかけて荒川長瀨に係留した水車（穀物脱穀）

充分にやっていけるだけの地盤ができていた京都の地を思いきり捨てて翌年上京して雅邦の門を叩いた。

その頃の事を玉堂は回顧している。「私の若い時分木口彫りの向うの名画がはやった。」京都で修業している頃であったが、私は夜店などで見つけ次第買って、絵はこれでなければいかん到底日本画ではいかんなどと思いいんだが一方にまた、習いこんだ日本画の良さを忘れられず、結局、日本画におもむくことになりました」と語っています。

進取の気持と迷いのうかがえる若い日の頃のことがあるが、京都を捨てて、東京を目指した事は、大局的にみて賢明であったと言わねばなるまい。

東京への出発にあたって、玉堂は夫人に、「いよいよ東京へ出ようと思う。」

この情勢では、東京の方が新しいものを研究するにはよい。然しそうするには、今迄のような収入の道もない事だから非常な決心を要する。決心にどうしても耐えてもらわねばならない。自分の大成する手段としてそれより外にないのだ。」この時代の玉堂の写生には葉の陰影等に洋画風の光と影がうかがえる。玉堂は雅邦に師事してから、短時間の間に狩野派の画技をきわめ、師の信頼を得た。現存している玉堂その頃の山水画と師の作品を

比べると実に近似している。

玉堂と言えば山水画、荒川、奥多摩の景色を思い起すのであるが、京都時代から初期美術院時代には他の画風の作品が多くのごされている。

玉堂は明治四十年に文展が開催された以来山水画を近代的な風景画として組立て狩野派より脱皮するとともに、昔習った四条派風の写生を基にして温雅な画風がよみがえり、人間の社会と隔絶した自然といったものではない。

玉堂は大正時代に入り、荒川長瀬に度々スケッチに通い選んだのが「切立った岩盤に縫うように清流が流れ水車に出会う、四里に及ぶ舟下りを体験しこの風景がもとで『行く春』が完成した。

どこまでも人が居り、そして働き、人の居ない風景の場合においても人の生活と心情のうかがえる風土を描こうとした。

画技が円熟の境をこし、枯淡の域に達した最晩年においても、スケッチ帳と鉛筆をはずさずスケッチを続けた。

最晩年の鉛筆スケッチは皇后殿下より病中見舞いに頂戴した牡丹を写したものである。画人の生涯としてこれ程美しい臨終はあるまい。次ぎの事を記しておきたい。

玉堂の口癖に「絵画の師は自然に有り」自



今春の荒川長瀬風景
「蓬莱島付近を下るライン船」明治10年頃より営業開始

然観察を入念に行なえば「おのずと心に風景が鮮明に映し出される」玉堂は自然の申し子と評価する。

一方、大正から近世を迎えて埼玉県と東京都を流れる荒川はナウマン博士（東大地質学
科初代教授）や宮澤賢治（岩手県盛岡）らに
よって地質の宝庫として広められた、秩父鉱
物陳列所（県立自然史博物館の前身）が大正
十年開設され後に「国の名勝天然記念物」と
して大正十三年に指定された。これを受けて
埼玉県は自然史博物館が平成九年寄居町に開
設この壁面に川合玉堂の「行く春（五m×二
十二m）」の巨大陶板画を備え讚えた。



川合玉堂「行く春」陶板巨大壁画 5 × 22m 埼玉県川の博物館

◎引用・参考文献・協力者

- ・東京国立近代美術館「所蔵作品展」 平成三十年四月十一日
- ・埼玉県立川の博物館（大里郡寄居町） 平成二十九年八月九日
- ・玉堂美術館（東京都青梅市御岳） 平成二十九年八月十日
- ・川合玉堂名画 思い出の里（春・夏篇）・（秋・冬編）
山種美術館・学芸部長 細野正信
- ・川合玉堂写生帳 山水編・花鳥編
山種美術館・学芸部長 佐々木直比古
- ・荒川長瀬の清流写真撮影 平成三十年四月十日